

全カリ総合部会長の4年間を振り返って

— 本年度末で退任される野田嶺志総合部会長に聞く —



■2期4年間ご苦労さまでした。4年間終えて、今胸に去来するものは。

野田 この4年は僕にとって大切な4年になったという印象ですね。大学ってなんだろうかという、教員なら誰でも持っていますが、古い大学に対する憧れや期待もある反面、僕らの世代に共通なのかもしれません。もっといい大学が生まれてくるんじゃないか、そういうものに近づけたという喜びが率直な感想です。本当に本当に楽しい4年間だったですね。

一番大事なのは、率直にものが言える場に出会うことができたということですね。こういう生活を送ってみよう、こういう人生を送ってみよう、こういう議論をしてみよう、自分の場をこういうふうと考えてみたいということが目の前に広がってきたのがすごく嬉しかったですね。

■総合教育の理念や目標が分かりづらいとの指摘もありますが。発足時はどういうものだったか、実施していく過程でどう変わったか。その点をご説明いただきたいんですが。

野田 そこは非常にむずかしいんです。現実と理念と両方一緒に引っ被って立ち上がってきて、その状況はそれほど今も変わってないんです。その間4年間の

議論とか4年間の工夫というものが進んで来ましたよね。これは率直にいうと、もしかするとまだ現実化していない理念とか工夫ですね。一番問題なのは立ち上がる時の現実についてまだ未解決というか、皆が触れていないんですよ。

■もう少し具体的に言うとうどういうことですか。

野田 一番考えているのは、つまり一般教育部から全カリに移行して行く時に移行の仕方について議論が十分煮詰まらなかった。つまり未来への希望というものが見えなかったということですね。だから、未来の希望のないところに何が起るかと言えば、皆生きて行かなければいけないから、それぞれがそれぞれの考え方を理念とごちゃ混ぜにして強調し始めていくんですよ。そうすると、それを受け止めた我々後輩は、正論なのか、立ち上がった時の現実問題の余波なのか、その区分けがしにくい時があるんですよ、当事者じゃない限り。それがずっと尾を引いているんですよ。

■新しい理念と処理の仕方というものがごちゃごちゃになっていたとおっしゃっていましたが、どこに問題があったんでしょうか。

野田 立教が一人ひとりの構成員によって作られていくというところに起因すると思うんです。ここくらい教員、職員、学生が皆自分の身の丈で生きていて発言してそれを認め合ってチームが作られているところはない。これはすごくいい面があるけど、今仰ったようにお互いを認め合う限り歴史の変化というか歴史の進歩というのは遅々として進まないところがあるんですよ。しかし、それを否定的に捉えるわけには絶対にいかないと思うんです。こういう大学像というのはものすごくいいことだと思って、これ以上よくする必要もないくらいいい面があるんですね。これが全カリを生

み出しているし、全カリの理念というものを生み出している。ただ今後のことを考えると、全カりに理念委員会を是非作っていただきたい。なんで全カりに理念委員会がないのかこの4年間ずっと悩み通しましたよね。全カりは新しく生まれた組織だし、金食い虫だと言われてはいますし、全カリ部長は学部との協調の中で総長の全体の方針の中で頑張っていかなければいけないということはわかるんですけどね。辛いと思いますよ。全カリ部長にそういう理念的なバックアップのチームとかシステムとか力の塊がないとね。全カリ部長が一番苦しいんじゃないかな。

■教育内容が一般教育課程とどういうふうに変わったとお考えですか。

野田 これは先生一人ひとりによっていろいろとありますけど。一番変わったのは何かというと、先生方が学生に対して問いかけるといふ局面が少しずつ出始めてきたということでしょう。今まで先生方の気持ちとしては何とかして学生を鍛えてやらなければいかん。その鍛える時には問いという作業がまどろっこしいんですよ。全力投球しなければならぬ。自分の持っているものをすべて出さなければいけない。そういうときに、問いというのは自分が100%で学生が0%という関係ではないんですよ。案外フィフティ、フィフティの関係なんです。だからね、授業に問いかけができた、レポートを多くするとか、議論を多くするとか、発言してもらおうとか、履修要項には多様な言葉が書いてありますけど、ひとことで言えば、立教大学の全カリの授業の中に問いという概念が生まれ来つつある。問いというのは苦しいけどね。昨日の晩付け焼き刃で予習してきたノートでやるわけにはいかないからね。自分の分野だけに限定しないで、問いというのは人間が問われるわけですから、いろんなところから問いが出てくるわけですから。問いの仕方とか、問いの内容とか、問いの方向とかを限定するような、学問の下請け的な授業ではないわけですから。問いというものが一歩大学の中に生まれてくれば、大学教員も変わるし、授業も変わるし、学生の好奇心も変わってくるんですよ。だから、わずかに3年の経験の中で、そういうものが意識的になってきてるとか、それに慣れてきているとは言いませんが、後戻りできないようなところに少し動いて来ているんじゃないかな、という印象ですね。

■総合の魅力というのはどういうふうにすれば出せる

とお考えですか。

野田 講演会が何故おもしろいか。カルチャースクールが何故おもしろいか。しゃべる人が聞いている人を意識しているからですよ。大学の授業は今までしゃべる人が聞いている人を意識していなかったんですよ。相互教育というのは語る人、それを聞く人がお互いに意識しあうということが総合の一番ポイントなんです。そこからじゃないと、多彩な好奇心とか、多彩な創造力とか出て来ないんだと思うんです。

■総合Bというのが脚光を浴びているところがありますが、総合Bについては、どういうふうに思われていますか。

野田 総合Bというのが授業としていいかどうかということは相当疑問をもってます。僕が外国の大学で一番引きつけられるのは彼らが授業の内、外でチーム作って共同研究をやったり、茶話会をしたり講演会をしたりしてますよね。そういうものが学生に知らず知らずのうちに総合的にものを考えたり生きていることと学ぶことが、4年間に限定されていますが、一つのことだというふうに育っていい大人になっていますよね。それができないから授業の中でやっているわけです。本当言うと、立教が21世紀の中でどういう大学作りをするか、何が立教の良さなんだろうかと、それは契約だけで生きている人間像ではなくて、皆が立教の中でびちびち跳ねている、そこが立教の良さだということをおもいますね。

■目先が変わって学生には人気がありますが。

野田 学生がそう思っている間に頑張らなきゃいけない。学生に、なんだこれも一緒かと思われたらおしまいです。本当言えば学生が飽きないところへ近づけようと思ってやっているんだけど、そのまま流れていくと危ないと思っている。本当に不安なんです。最後の段平を引き抜いたんですよ。総合大学の良さの伝家の宝刀をね。持ってる力すべて凝集したものを抜いてしまったんですよ。抜いた時に教員の方々は最後の伝家の宝刀を抜いたという意識を持たなかった。立教にとってこれを抜いたというのは辛いという気がするんですよ。あと残っているのはなんだろうか。今三つの取り組み方がありますよね。旧一般教育部の流れの中から取り組んでいる取り組み方、自分たちの狭い範囲でチームを組んで取り組んでいる取り組み方、学部

横断型で取り組んでいる取り組み方、まだ全学横断的な有志のチームの取り組み方というのはないですけどね。是非これを実現していただきたい。

■学生の全カリの授業に対する反応って、様々で単純ではないですね。シンポジウムである学生が「やがてパンキョウと同じって言われるんじゃないでしょうか」と言っていましたけど。学生の全カリに対する反応はどんなふうなものかみてきましたか。

野田 辛いところですね。全カリというのが今までの一般教育のあり方よりいいとか、全カリは自分の求めているものに合っているとかが、そういう感想を持っている学生はピンセットで集めるくらいでしょう。大学全体が学生から絶望視されているから、全カリだけが悲壯がることはないとは思いますが。

何とか全カリを立教大学の中に位置づけて、立ち上がらせて、一つのルールのようなものができて、不動の体制ができるという現実論が先で、全カリってというのは立教大学の中で新しいものだ、違うものだ、おもしろいところじゃないか、一つやってみようじゃないかというのはその次のところに置いていてきましたね。

■2000年度にカリキュラムを変えようということがあって、一般的に分かりづらいといわれていますけど、そのところを一言でいうと、どうして今見直さなければいけないんですか。

野田 大学が一つになるということなんですよ。全カリの理念を押し進めていったり、全カリを実施していくということは、今の大学の中で、大学をひとつにするんだという考え方は、日本の大学の中でもないんですよ。やはり、大学がひとつになるということが今の大学に非常に問われているんですよ。学生は大学がひとつだったらどんなに住みやすいか。

僕は歴史をやっていますが、リベラル・アーツとかカルチャーとかは市民社会の概念なんですよ。ギリシャとかローマ以降の世襲制の歴史の中には、自分の人生の目的とか人生の事実としてはあるが、選択はなかったんです。市民社会と言い切っていいかわかりませんが、封建社会的なものから人間が解放された時に初めてアイデンティティ探しのリベラル・アーツとかカルチャーとかの議論が出てくるんですよ。これを、また貴族社会の中でお前は会計屋とかお前は技術者とか、受け入れる社会側がその人間の全体像ではなくて、あ

る面を協調して人間をつくってしまった。ある一面的な人間像というのが近・現代における理想的人間像なんです。

2000年に向けてあせっているんですよ。立教大学が、一面的な人間が理想的な人間で、社会に奉仕したり、権力に奉仕したり、国家に奉仕したりできる人間としてベターだということのをうんと生かしていく方向に進むのか、それともそこのところで悩むか、そういう議論の瀬戸際に立っているということです。

■リベラル・アーツということをもっと煎じ詰めて議論する。それを全学に波及させていく手がかりは全カリなんじゃないでしょうか。

野田 大学がひとつになっていくというもののらせん状のどこかに全カリが位置しているんじゃないかと思っています。

皆に広がっていくためにどうしたらいいかわからないのはネットワークづくりね。情報のネットワークづくり。学生の声がどうしたら我々と結びつくか。担当されている先生方の声がどう我々と結びつくか。この二つのネットワークづくりが現実的具体的課題としてはあるのかもしれませんが。

学部作りの経験は皆もっているんだけど、全カリづくりの経験はだれもないんですよ。

■最後に一言あれば。

野田 全カリの様々な良さのうちのひとつは、今まで全く縁のなかった各学部の人たちがお互いを認めあいながら議論を進めていけるということなんです。これはいつまでも大切にしていってほしいし、多くの先生方に集っていただきたいですね。そして、かつての「スポーツの立教」などと同じくらいに「全カリの立教」という言葉が並ぶようにしていただくとこんな嬉しいことはないですね。

■ありがとうございました。



「ジェンダーを講義する—全カリと専門で」

伊藤 るり 氏

(社会学部教授)

五十嵐 暁男 氏

(法学部教授)

五十嵐 明治学院大学から移って来られて立教の雰囲気、学生の雰囲気はどんなふうにお感じになりましたか。

伊藤 環境が相当に違うと思います。戸塚の校舎は駅から遠いですし、いわゆる学生文化というのが最初からあるわけではないので、そういう意味では、つらい部分はあります。けれども、自分たちで作らなければいけないという意識があるから、能動的に積極的に動く学生がいます。そういう学生にここではあまりお目にかからない気がしています。池袋自体が非常ににぎやかで、いろいろな機会にあふれ、情報にもあふれているからでもあるんでしょうが。

五十嵐 全カリの話ですけども、今年度担当された科目「現代社会1—ジェンダーとセクシュアリティの政治」は、初めてのご担当だと伺ってますけど、基本的なことからお聞きしますが、履修者の男女比ですとか、学年構成とかどのようなになってらっしゃいますか。

伊藤 はっきりとしたことはわかりませんが、240～250名ぐらいの登録があったかと思います。成績をきちんと出せたのは、70名弱じゃないでしょうか。一応、リアクションペーパーとか出させてありますから、最後のレポートとあわせて採点をしたんですが、だいぶハードルが高かったのかなと思うのと、初めての授業ですから私の方が不慣れで、もう少しうまく構成をすればよかったという反省もあります。学年的にはやはり1年生が多い。政治という名前が入っているせいかわかりませんが、法学部の学生さんが大変多くいらっしゃってました。学年的には、1年生が6割ぐらいでした。

五十嵐 レポートがきつかったんでしょうね。

伊藤 さて、どうでしょうか。そんなに難しいテーマじゃないと思いましたが。今回の授業でよくわかったことですけども、やはり女性解放運動とかリブ



伊藤 るり 氏

とかと呼ばれている運動の歴史について、全く自分たちの今の日常と無関係のところにあることと感じてますね。それからもう一つは、あまり性差別ということについて自覚的ではないですね。ですから少しビデオを使って過去に遡ったり

して、工夫しないと現実味のある問題としては受け止めてもらえない。ただしセクシュアリティの問題に関して、例えば性同一性障害と呼ばれている問題、性転換の問題とか、性自認の問題については、非常に関心が強いように思いました。

五十嵐 ビデオを使うとおっしゃったでしょう。どのくらいの頻度でお使いになりますか。

伊藤 かなりの頻度で使います。やはり言葉で伝えることが出来るものは限られていると思います。例えば、70年代前半の運動に参加していた日本の女性たちが今どうしているかということを取り録している映画(LOOKING FOR FUMIKO)を見ました。

当時の記録とともに本人たちが登場して自分たちの20年間を振り返って、どういうふうに考えているか、どういう生活を目指していたか、今はどうか。すごくインパクトがありました。当時の運動について何も知らなかった学生も、彼女たちの今に接することで現実的なこととしてとらえることができます。たとえば、地方選挙で、今、彼女たちが目指していることとか。

ただビデオの使い方として自分で反省しなくちゃいけないと思うこともあります。ビデオはどれもこれも長いんですよね。そのあとでディスカッションしたいと思っても、時間が不足します。また教室も大きい。厳しいですね。毎回ハンドアウトを作って配り、ビデオを見る時にも最初にどういう趣旨で見てもらいたいかということを書いて、見たあと本当はディスカッションしたいわけですが、なかなかそれがうまくいってない。

五十嵐 私も使うことがあるんですけど、ビデオが編集できないですね。要点をつかみながら編集されていればいいですけど、繰り返しであるとか。もし編集できていれば効果的に使えるなという感じがしますよね。テーマに則したビデオを探すこと自体がむずかしい。

伊藤 そうですね。90分の授業でまともに何かやろうとすると相当加工したり準備の時間というのが必要です。テクニカルにも、社会科学を教える時に、最近では活字だけではすまないところがあるなあと痛感しています。ですから、視聴覚教材は使いたいたいけれども、その場合にどういふふうなルールを自分で意識化していかなきゃいけないか。教授法のようなものが必要だと思うんです。

五十嵐 実は、私は提案しているんです、全カリでそれを開発すべきだと。今おっしゃるように関心が十分でないようなテーマについて映像でみておくと、あとで議論する時に、あの時あの場面の彼が、彼女が言ったあのこと、というふうに通経験になるんですね。

伊藤 そうなんです。それから教員がどうも代弁してしまう。解釈をすぐにしてしまいます。例えば先ほどお話した映画に出てくるんですけど、婚姻制度を否定して家族形成をしないって自分で決めた人がいまは病院でお掃除して暮らしている。アルバイトという形で。本当に給料がぎりぎりのところで生活してるわけですけども、インタビューの人が、リップをやっていてこういう生活になってあなたはそれで後悔してないのかって聞くんですけど、その人はちゃんとそれについて説得力のある話をするんです。そういう話はとても教員にはできません。自分は生きてないわけだから、本人じゃないと言えないことってあるわけですから。

五十嵐 無理して自分が言おうとするとアジテーターになっちゃう。

伊藤 教材以外にも、本当は講演会とかゲスト・スピーカーもいいと思うんですけど。

五十嵐 ところで、今回どういう理由で「ジェンダーとセクシュアリティの政治」というテーマを選ばれたのですか。

伊藤 今回こういうテーマにしたのは、ひとつには大

学の中でセクシュアル・ハラスメント防止対策のためのガイドライン作りを何人かの教職員で担当しているからです。これは、人権問題委員会というところでやっています。ガイドラインというのは、ガイドラインを作る過程



五十嵐 暁男 氏

で学生の声が入ってくるのが一番いいわけです。ところが、自治会がないですし、被害者の中で一番重要な位置にいるのが学生なのに、学生の声を取り込むということがむずかしいわけですね。全カリの科目をお引き受けすることになって、これはいろんな学部の学生がいるんだ、じゃあ、と思ったんです。

五十嵐 男子学生のジェンダーについての関心の仕方とか反応の仕方とかどういふ特色があるんですか。

伊藤 男子学生だからどういふふうにはみていません。男性にもいろいろな人がいると思うので。でもセクシュアル・ハラスメントの問題については結構自分の関わる問題として反応が返ってきます。例えばアメリカのセクシュアル・ハラスメントの研修ビデオというのがあるんですけど、アメリカへ日本の企業が進出した時に日本の企業の社員に対してどのような研修ビデオを作っているか、もう一つは海外と関係なく日本の企業で研修ビデオを作ったときどうなのか、その二つを見せて対比させてみるんです。

五十嵐 社会的な常識というか、トレーニングの場になってるわけですね。そういうセクシュアル・ハラスメントの問題よりもある意味ではもっと深い意味で、自分の中のジェンダーの問題を考えていくという姿勢を持っている学生もいるんですか。

伊藤 います。それはジェンダーの問題だけではなくて、先程言ったセクシュアリティの問題も関わりがあるんですけども、ジェンダーというのはどうしても男女というふうに分法で、二項対立的なものごとを考えるとところがあります。でも性自認の問題は、性現象を二項対立的に考えるということにかなりプレーキをかけてくれる問題だろうと思うんです。ですから、自分の中に「女性的なもの」もあれば「男性的なもの」もある。女性の側もそうです。そういうことに気づく。それはすごくいい効果があるみたいですね。

ああ自分は無理なくていいんだ、個として生きるということが重要なんであって、自分の考え方とか自分らしさということを追求すること、「男らしさ」とか「女らしさ」を追求するということは、必ずしも同じことではないんだというようなことを書いてくる学生もいます。

制度的な問題としてジェンダーを捉えるようにするというので、自分の内面とちょっと距離をとって眺めるという訓練ができれば、いわゆる性差別とかセクシュアル・ハラスメントの問題に、比較的入りやすくなるというか理解しやすいんじゃないかと思うんです。

五十嵐 専門科目との関係ですが、先程少しお話しされたように、私が担当している「日本政治論」との関係で言えば、特に地域の中の政治を考える時に、最近では投票行動でも女性の投票というのが、自律的になってきたし、女性の投票の変化ということが選挙結果に大きなインパクトを与えるという結果もあります。今度の統一地方選挙で話題になっていますけれども、地方議会への進出ということもありますよね。議会まで行かなくても地域の中でのNGOであるとかいろいろな問題に女性が大きく関わってきている。それは日本の男性が会社にとらわれてるから女性しか動けないんだという見方も一方ではできるんだけど。

でも、高齢者福祉の問題であるとか、本当は男性も持たなければいけない関心だけれども、女性が気づかざるをえない。環境問題などもそうですが。政治学では現象として表れた政治におけるジェンダーの問題、行動として表れたものを捉え、それを対象にして考える。これは政治の話ですけども、政治とか社会とか経済とか、そういう専門科目といわれているものを学ぶ、勉強する、講義する、そういう内容と今講義されている科目とどういうふうに関連してくるのか。今までの専門科目も、もしかしたら男性中心に考えられてきたものであったかもしれないわけですよね。しかも国家というレベルがいつも問題になってきている。そういう意味ではなかなか表面に出にくかった部分を明

らかにしていくという科目のような気もするんです。そのきっかけになるような、あるいは基礎的な知識を講義するような科目であると思いますが。

伊藤 そうですね。今社会学のカリキュラムが変わるところでして、専門科目との連関ということになるとやや難しいところがあるんですけども。ただ、わたしは、一貫して国民国家とか民族の問題に関心をもってきました。ところが、民族の問題を語る時にも暗黙の内に男性を中心においた議論が多い。ナショナリズムというものが、立体的にジェンダーという視点からも捉えられるように、そのために前提としてジェンダーの概念とかセクシュアリティの問題についても、基礎的な概念的な理解を獲得できるようにお手伝いをしていると理解しているわけです。

4月からは「国際社会論」という授業と「エスニシティの社会学」という授業とふたつの専門科目を担当します。その両方に関わる前提だと理解しています。

五十嵐 さっき法学部の学生が多いという話がありましたが、文学部とか経済学部とか理学部とか他の学生もいると思うんですけど、ご苦労というか、専門を教えるときは自分はこういうふうなところをかなり意識してやった、とかいうことはありますか。

伊藤 かみ砕くというか、ジェンダーというのは、知識としては社会科学だけではすまない概念ですよ。生物学的、生理学的、遺伝学的、いろいろあるわけで、そういう意味では意識しているといえるかもしれません。なるべく学際的な形で概念を紹介するということはしたかもしれませんね。ただやっぱりまだ1年目ということで来年度もう1回やらせていただけるようですけど、もう少し工夫したいなと思っています。

五十嵐 本日はお忙しいところありがとうございました。来年度の授業も期待しています。

第4回 立教大学英語教育セミナー

| | |
|------|-------------------------|
| 主催 | 立教大学全学共通カリキュラム英語教育研究室 |
| 日時 | 1999年4月1日(木) 10:00から |
| 場所 | 立教大学池袋キャンパス7号館 |
| 基調講演 | 霜崎 實 氏 (慶応義塾大学環境情報学部教授) |